

法
と
道
徳

西田 幾多郎

我々は、通常所謂自然界を唯一つの客觀的世界と信じて居るが、認識主觀によつて構成せられた自然界が唯一の客觀界ではない。認識主觀の奥に意志主觀があり、行爲主觀がある。我々に對し眞に直接に與へられたものは、意志の對象界でなければならぬ。我々は知識の對象界の奥に意志の對象界を有つて居る。所謂文化現象の世界といふのは、此處に求むべきであらう。意志の對象界といふのは、我々が意志することによつて現れて來るのである。否、我々が行爲することによつて現れ來る世界である。藝術家が純なる藝術的創作の立場に立つ時、藝術的對象界が現れて來り、道徳家が純なる道徳的行爲の立場に立つ時、道徳的對象界が現れて來る。皆認識主觀を超越し之を内に含む自由我的對象界として現れ來るのである。而して藝術の

世界と道德の世界との間には、所謂經驗の世界に於ける知覺と經驗的知識との間の關係の如く、自由我の對象界に於て、所與の世界と構成の世界との關係の如きものがあると思ふのであるが、私は所謂法律の世界といふのは右の如き超越的意志の構成の世界即ち道德の世界の初階であると思ふ。法律といはれるものがそれ自身に何等の價値もなく、唯他の手段として價値を有し得るものと云ふならばとにかく、苟もそれ自身に文化價値を有するものならば、此の如き意味に於てでなければならぬ。

法學者の間には、法の本質について種々の學説があることであらう。併し私は法を敬して之に従ふと云ふことが、自由の自覺を有する我々人間の義務として、法其者が我々に對して權威を有するには、法自身が目的其者として價値を有するものでなければならぬと思ふ。然らざれば法は單に幸福の手段として、我々に對して絶對の服従を要求することはできぬ。無論、今日の法律は單に功利的な目的を有するものが多いのであらう。又その多くは或階級の爲に造られたものとも考へ得るであらう。併し内容の是非は姑く置き、法其者を敬し、法の爲に法に従ふといふ形式的意志其者が、既に人格的内容を有し文化價値を有するものでなければならぬ。私は與へられた法に従ふといふこと自身が既に人格的意義を有すると考へるのである。或

は道德的意義内容を有せない法は、何等の價值もないと云ひ得るであらう。併し私
は法に従ふといふことが、單に道德の爲といふことではなくして、それ自身に文化價
値を有すると考へるのである。考へ様によつては、不可知的内容の權威に服従する
といふこと自身が、一面に宗教的意義を有し、單なる主觀的道德に對し、それ自身の意
義を有すると考へることができ。道德法は外に超越的根據を有することによつ
て、その意味を全くすると云ひ得るであらう。

我々は自己の人格的統一と連絡のない單に偉大なる外界の力に對しては、唯恐怖
を抱くのみであるが、偉大なる人格的力に對しては、無限の畏敬を以て之に懾服せざ
るを得ない。我々が法に對する無限なる畏敬の念は、人格的統一の無限に深い根抵
たる超越的意志に對する畏敬の念に外ならない。超越的意志は所謂意識一般を超
越し之を内に含むのみならず、それ自身の對象界を有する故に、かゝる世界の構成は
我々の意志其者の目的とならねばならぬ。意志は他の目的の爲にこの世界の法則
に従ふのではなく、意志自身の目的の爲に之に従ふのである。この對象界の法則は
全然自然科学的法則とその根抵を異にして居る、一層深い根抵の上に立つて居ると
いふことができる。自然の世界から文化の世界が發達すると考へられるが、自然界

とは超越的意志が自己の内に映せる影像に過ぎない、時を超越する超越的意志は却つて自己發展の過程として之を内に含んで居るのである。

二

知的主觀の奥に意志主觀行爲主觀があり、我々が此立場に入る時、そこに自由我の世界が開かれる。藝術の世界は此立場によつて成立するのである。純粹視覺の發展として繪畫の世界が成り立ち、純粹聽覺の發展として音樂の世界が成り立つ。併し作用の作用たる意志其者の自覺の方向に於て、法律の世界、道德の世界が現れて來る。此等の世界は意志の綜合的構成作用の内容として現れ來るものであつて、經驗的知識の世界に於て云へば、カントが力學的原理によつて成立すると考へた存在の世界に比すべきものと思ふ。綜合的認識の立場と考へられる所謂純粹自我は超越的意志の反省の方向であつて、此立場に於て成立する存在の世界の底に、超越的意志其者の積極的内容の世界として、法律道德の世界が存するのである、即ち同一の立場によつて成立する實在の表裏の兩面と考へてよい。

我々が意志の立場に立つ時我々に對し與へられたものは、單なる知識の對象では

なくして、意志の對象でなければならぬ。水は單に無色透明なる液體ではなくして、我等の渴を癒すものであるのである。プラグマチストの云ふ如く、すべて知識は實踐的意義を有つと考へることもできる。併し知識を實踐的と考へるのは、知識と意志とを對立せしめ、前者を後者に従へ様といふのであるが、我々は尙一層深く意志の立場に徹底して行く時、知識の立場は意志の立場の中に含まれて来る。我々は全然知識の立場を超越して之を内に含む時、知的對象其者の背後に直に意志の對象を見るのである。藝術的創作の立場に立つ時、色其者形其者が意志の對象となる。水の性質其者の背後にも人格的内容を見るのである。併し藝術の立場に於ては知覺内容をも人格化することができるかも知らぬが、思惟の對象界をも人格化することはできない、實在界の背後に人格的意義を認めることはできぬ。超越的意志が自己自身に反つて、所謂實在界其者の背後に人格的意義を認める時、法律の世界道德の世界が成立するのである。法律道德は全實在を人格化する神的作用の過程である。我々が自然を超越して自由なる人格の立場に立つ時、先づ法律の對象界が現れて来る。此世界に於ては物は一々何人かの所有に屬するものとして、物と物との間に人格的關係を見る。物は人格の表現として犯すべからざる威嚴を有するのである。物は

單なる存在ではなくして人格發展の過程の中に入つて來るのである。ヘーゲルは
 “Das Recht ist zuerst das unmittelbare Dasein, welches sich die Freiheit auf unmittelbare Weise ge-
 bt” といつて居る。

我々が自然の生活から自覺的意志の生活に入る時、法律的社會が成立する。自然
 界を唯一の世界と考へれば、かゝる社會は人爲的とも考へられるであらう。併し意
 志を一層深い實在と見る時、我々は之によつて一層深い實在界に入ると考へること
 ができる。此世界に於ては、すべての物は我々の欲望の對象として見られ、何人かの
 人格に屬するものとして實在性を有つて居る。單なる自然現象は此世界に於ては
 實在性を有せない。或人が荒地を開拓したと云ふので、その地面がその人の所有權
 に屬するならば、斯く荒地を開拓したといふ時間上の出來事が此地に於て實在性を
 有するのである。此世界に於て我々が自己の欲望を滿たすには、共同意志に於て認
 められねばならぬ、我々は共同意志に於て認められて生きるのである。是に於て法
 の爲に法に従ふといふ當爲の念が起つて來るのである。完全な道德的行爲も單に
 良心に従ふといふのみならず、此の如き客觀的法則に従ふといふことを含んで居な
 ければならぬ。唯道德と法律と異なる所は、法律はその内容として非合理的要素を

含んで居ることである、その内容は形式に對して偶然的であることである。此故に法律は單に形式的と考へられるのである。法律と欲求の内容との間には恰も物理的法則と知覺内容との關係の如きものがあるであらう。

三

單に思惟するといふことゝ認識するといふことゝは同一ではない、知識は概念と直覺とから成り立つ、範疇が知覺の内容と結合することによつて知識の客觀性を得るといふのがカントの考である。私は斯く云ふには思惟と直覺とを統一する意志の自覺といふものがなければならぬと思ふ。純粹意志が經驗的知識の根元でなければならぬ、所謂客觀的世界を構成する力の範疇は意志の射影である。併し意志は此の如き知識の世界を内に包むと共に、自己自身の直接の世界を有つて居る。此世界は自由意志の範疇によつて構成せられ、その所與は意志の構成として一々が衝動的である。知識にあつては、その具體的根元として意志の對象界に結合することによつて客觀性を得ると考へられるが、意志にあつては、意志が意志自身を目的として自己自身に還ることによつて、その客觀性を得る、即ち主客合一の純なる活動となる

ことによつて客觀的となるのである。衝動を純化すると考へられる藝術や、自然の欲求を合理化する法律や道徳は皆之に達する道行である。

我々の知識は經驗内容と結合することによつて客觀的となると考へ得るが、その内容は形式に對して何處までも外面的なることを免れない。此場合形式と内容とは、唯一層高次のな立場に於て結合せられて居るのである。自由我の對象界に於ては、特殊的欲求の中に一般的理想を求め行くことによつて、即ち特殊なるものゝ中に一般的なるものを見出すことによつて、客觀的となる。即ち形式と内容との合一否かゝる對立が消滅することによつて客觀性を得るのである。例へば、我々の知覺的經驗といつて居るものは、物理的説明に於てかゝる統一に達するのではなく、藝術的創作に於て形式と内容との純なる統一に達するのである。藝術的創作もかゝる意味に於て超越的意志の作用ではあるが、無限なる作用の作用として理性を内に含む超越的意志は、部分的なる藝術的對象界に於て自己自身を見出すことはできぬ、意志は意志自身の直接の對象界を有たねばならぬ。是に於て法律道徳の世界が成立するのである。藝術に於ては意志は存在の世界を超越することによつて自己の世界を構成するが、道徳に於ては實在界を内に包むことによつて之を自己の世界に構成

するのである。

我々の經驗的知識に於て理性と經驗内容と對立する如く、意志の對象界に於て法則と衝動的 content とが對立する。而して經驗的知識に於ては、形式と content とは何處までも内面的に結合することができぬのであるが、意志の對象界に於ては、對象が作用であり、作用が對象であり、形式が即内容であり、内容が即形式である。衝動を意識するといふことその事が、單なる認識の立場に立つて居るのではなく、作用の作用たる自由我の立場に立つて居ることを意味し、法の理解その事が直に行爲の動機となるのはカントも既に云つて居る所である。理性なくして意識はない、作用の作用たる理性の影を宿すことによつて意識現象が成立するのである。意志の對象界に於て法と衝動形式と content とは嚴肅主義の倫理學者の考へる如く本質上相反するものであつてはならぬ。超越的意志の對象界に於ける現象として道德法と動機の内容とは一つのものでなければならぬ。此等の孰か一つによつてのみ道德を説明しようとするれば、我々は越ゆべからざる間隙に撞着せざるを得ない。道德の本質は此等を統一する積極的なる意志 content にあるのである。或は現實に於ける自然的衝動と道德法の衝突の事實を指摘して、かゝる考に反對する人もあるであらう。此の如き人

は法といふのを唯自然法の意味に考へるのではなからうか。自然界に於ては物は法によつて動くのであるが、意志の世界に於ては法は自ら動くのである、法は物であり物は法である、共に皆自ら動くものである。

すべて我々の知識又は感情の對象界が先驗性を有し、我々に對し一般妥當的なるには、それ自身の積極的内容を有たねばならぬ、換言すればアプリオリがそれ自身に於て創造的でないければならぬ。かゝる場合に於てのみ、我々の作用は之に従ふべきものと考へられるのである。對象が作用に對し外的なる時作用に對して當爲となることはできぬ。數理の世界、物理の世界が我々の認識作用に對して當爲となるのは皆之によるのである。若し我々の意志が全然形式的にして何等の内容を有せず、如何なる内容にも無關心であると云ふならば、我々は何を爲すも自由である客觀的當爲は立たなくなる。我々の道德的行動の對象としては、意志のアプリオリの創造によつて成る意志自身の積極的内容の世界がなければならぬ、意志の自律性は之によつて成立するのである。此意味に於て道德的行動は藝術家の創造作用と似通ふ所がある、道德的社會は自由意志の創造せる藝術品である。唯その物理的世界と異なるのは、意志の對象界として對象即作用たる點にあるのである。例へば、道德的實

在としての家族といふ如きものは、全然人格的統一の上に立たねばならぬ。自由意志自身の創造せる實在として我々の目的其者でなければならぬ。宗教的意義から家族制度が發達したのは單に因果關係とのみ見ることはできぬ。併し家族といふのは單に冷なる義務によつて結合せられた人と人との團體ではない、積極的内容を有する愛の結合でなければならぬ、否家族的結合の根抵には暗い本能的要求すらなければならぬのである。畫家や彫刻家が女の肉を美化するが如く、暗き生の力を靈化することによつて、道德的實在としての家族が成立するのである。肉によつて與へられたものを、自由意志のアプリオリによつて、創造し構成したものが道德的實在である。之によつて肉は靈化せられ、靈は實在性を得る。私は超越的意志の創造的方面が純眞なる愛であると考へる、超越的意志はその一面に於て純眞なる義務心であると共に、一面に於て純眞なる愛でなければならぬ。純眞なる道德的實在としての家族とか國家とかいふのは、純眞なる愛によつて創造せられた超越的意志の積極的内容である。國家や家族の道德は單に因襲的道德のみではない、其中に純眞な感情の内容がなければならぬ。若し感情が超知識的の立場に於て、何ら自己自身の内容を有せないならば、カントの考へた如く感情を混することは意志の他律化と云ひ

得るであらう。併し純眞なる愛は恰も原始的生命が無限なる生物を創造する如く、無限なる人格的實在を創造する靈的生命の力である。此の如く内容こそ、自律的意志其者の目的となるものでなければならぬ。

所謂心理學的個人の立場から云へば、法は外界の權威に基くものとして、我に對して外的なるを免れ得ないであらう。我々個人が既に客觀的精神によつて構成せられた一つの社會に生れ來る時、その社會の法律制度は背くべからざる外的權威として我に臨んで來る。我々は之を不可解と考へることもできるであらう。我の自由を抑壓すると考へることもできるであらう。併し我々が之を敬すると云ふ時、法は我に於て全然外的なものではない。全然外的なるものは、之を恐れるも敬するといふことはない。我々が法に對して全然敬意を失ふた時、我々は權威を自己の中に求めなければならぬ。自己の中に自然を超越して無限に深い内面的權威を見出した時、道德的動機が成立する。併し無内容にして單に形式的なる道德的動機は、何等の客觀的道德法を與へることはできぬ。内容に無關係なる形式的道德法は主觀的たるを免れない。道德的アプリオリによつて創造せられた客觀的對象に於て、始めて内外合一し、目的其者を目的とする眞の道德的行爲が考へられるのである。而して

斯く無限に創造的にして我々の豫知を許さない先驗的意志の内容に對しては、我々は無限に深い外的權威を認めざるを得ない。神的權威説の倫理學者の云ふ如く、道德法は神によつて與へられたものとも考へ得るであらう。道德の内容が歴史によつて與へられると考へねばならぬのも之によるのである。無論その無限なる内容も我に對して外界的なるものではない、我の深き奥底に潜める道德的自我の創造の世界である。我々はかゝる世界に對して無限なる敬意を有すると共に又無限に之を愛することができる。

四

知識は先驗的形式に基くのは云ふまでもないが、内容と結合することによつて、即ち特殊化せられることによつて、その客觀性を得ると考へることができる。道德的行爲も單に形式的道德に合ふことによつて善となるのではない、單に動機が善であるのではない内容が之に合ふことによつて完全なる善行爲となるのである。而して内容ある經驗的知識を構成するには我々は個々の事實より出立せねばならぬ様に、道德的行爲も現實の與へられた事實より出立せねばならぬ。如何なる理想も現

實の事實と結合することによつて實踐的價値を生ずるので、甲の場合に於て善なる理想であつても、乙の場合に於て惡となることもあると考へることもできる。恰も藝術的創作が抽象的理想を基礎とするのではなく、具體的なる現實の奥に理想の光を見るのと一般である。無論、道德的行爲が現實を出立點とせねばならぬと云ふも、一般的理想を無視してよいと云ふのではない、與へられた現實を理想化して行くといふ意味である、現實を無限に可能的なるものゝ統一と見るのである。唯その統一は單なる無限の總和ではない、達すべからざる極限として、現實は可能なるものに分析し盡すことのできない積極的内容を有つて居なければならぬ。此立場から見れば一般的なものはその發現の手段となるのである。單に一般的なるものから意志することはできない、意志は意志に始つて意志に終るのである。無論道德的行爲に於ては、人格を目的其者とするといふ形式的法則が基礎とならねばなるまい、此法則が力として現實を超越的意志の内容に構成することではなければならぬ、否此立場に立つことによつて、現實の根抵に深い實在を見出すことではなければならぬ。私はかういふ意味に於て自然法と道德法とはその性質を異にすると思ふ。自然に於ては、一般的法則が即ち自然である、特殊的内容はすべて一般的法則に分析せらるべく定

められて居る。之に反し道德法は實踐的規則と同一性質のものでなければならぬ、唯此法則が目的其者であることに於て、他の實踐的規則と異なつて居る、此點に於ては却つて自然法とその性質を同じくすると云へる。而して目的其者の内容は現實を超越的意志の實現の過程として見ることによつて與へられるのである。知識に於ては特殊は一般の中に含まれると考へられるが意志に於ては一般は特殊の中に含まれる。道德的行爲の内容とは我々が純なる理性の立場の上に立つ時、現れ來る創造的意志の内容でなければならぬ。唯その超越的意志の内容なるが故に規則たると同時に法則であるのである。

私は是に於て道德的行爲の内容と歴史的内容との間に密接の關係あるを考へざるを得ない。歴史的發展なくして文化なきは云ふまでもない。自然現象は空間の上に於ける實在とすれば、文化現象は時間上に於ける實在である。空間的内容は物體界を構成し、時間的内容は文化の世界を構成する。此點に於て文化現象は生物的現象とその性質を同じくするのである。時間的發展なくして生命はない。古來の文化を一掃して新しい文化が起ると考へられる場合であつても、古い文化が失はれたのではない。同じ動機や思想から起る革新でも同一の文化を生じない。赤を

見てから青を見るのと白を見てから青を見るのとは同一でない。そこに精神現象と物體現象との區別がある。動的理想は時間的統一の上に現れるのである。無論、歴史的事實と云つても、自然に對して何等の變化を與へることはできぬ、寧ろ「時」の軸に獨立であるといふのが自然の性質である。古の殿堂を記念する礎石も路傍の石も同様である。此意味に於ては、歴史的事實も、その時代、その時代に消えて跡なき非實在的なものでなければならぬ。併し歴史的事實は夢の如く生滅する個人の空想とは異なつて、意識一般の對象界に屬するものとして客觀的でなければならぬ。此點に於ては、又自然現象とその性質を同じうすると云ふことができる。此の如き主觀的にしても而も超個人的なる對象界は、唯超越的意志の立場に於てのみ考へることができぬ。客觀的精神の内容は歴史に於て發展するのである。内容なき「時」は自然界を構成し、内容ある「時」は歴史を構成するのである。右の如き理由によつて、我々は道徳的行爲の内容をいつも歴史の中に見出して行かねばならぬ。

經驗科學の法則は普遍妥當的であるが、道徳には此の如き法則がないとは多くの人の云ふ所である。併しかゝる考はその意味を嚴密にして置かねばならぬ。經驗科學の法則が客觀的と考へられるのは何によるのであるか。所謂經驗界とはカン

トの綜合的原理と云ふ如きものによつて構成せられたものでなければならぬ。綜合的原理といふものは理解力の範疇と直覺の形式たる「時」との結合によつて出來たものである。此結合はコーエンによれば、意識の統一によつて成立するのであるが、私は知識の形式が内容と結合することによつて客觀的となると云ふには、作用の作用たる意志の形式が考へられねばならぬと思ふ、理性と知覺との結合は唯意志の立場に於て可能である。我々の經驗するといふのは一種の意志の作用である、經驗的知識の客觀性は意志の超越性に基くと考へ得るであらう。併しカントが「時自身は止まる」と云つた様に、意志には反省の方面と創造の方面とが結合して居る。個人的人格の意識について考へて見ても、我々の意識は過去の經驗を保存すると共に、一步一步創造的である。一方に於て繰返し得ると考へ得ると共に、一方に於て又繰返すことができぬと考へねばならぬ、所謂自然界とは超越的意志の反省の内容に過ぎない。我々が所謂興へられた經驗をカントの綜合的原理の如きものによつて、經驗界として構成して行く時、超越的意志の對象界に入込むのであるが、それは此立場に於て反省して行くといふことである。「時」は流れ行く純なる經驗の形式、純なる作用其者の形式である。「時」を反省するといふことは「時」を止めて見ることである。我々

は想起作用によつて「時」を超越し、之を自由に取扱ふことができる。かゝる想起の自由によつて我々の所謂意志の自由が成立つ。我々は此立場に於て一たび底なき自由を感ずる、原因なく、法則なく、勝手氣儘な自由意志を有つとさへ信ずることができ。併し我々が此の如き自由の立場に立つて行動しようとする時、我々は自己の力に對して衝突を感ずる。フィヒテの我に對する *Anstoss* といふのも此の如きものであらう。併しこれは意志に對して外來的ではなく、意志自身の射影に外ならない。すべて作用は作用自身の内容によつて限定せられるのである。或一つの作用に對して全然外來的なるものは、此作用に對して零でなければならぬ。斯く作用が作用自身の内容によつて限定せられること、換言すれば作用が自己自身を限定することが即ち反省でなければならぬ。此如き意味に於て超越的意志が自己自身を反省し、自己自身を限定した時理性的形式と知覺的内容との結合から、所謂經驗界が成立するのである。時の系列を止めて見ることによつて物の概念が成立し、之を繰返し得ると見るとによつて因果律が成立し、かゝる系列の無數を反省し統一することによつて自然界が成立すると考へることができ。[時は止まる]と考へ得るのは唯「時」の範疇を脱し得る自由意志の立場に於て可能なるのであつて、之に基いて法則の世界

自然の世界が成立するのである。而して自然の世界は即ち法則の世界なるが故に自然法は自然界に於て客觀的なるは云ふまでもない。然るに我々の意志は、自覺に於て省みることが即創造することである如く、自己反省の裏面に創造的方面を有つ。道德の世界は此如き意志の創造の世界、積極的内容の世界に屬するのである。我々は現實の經驗を、その背後に潜める超越的意志の立場に於て構成して行くに當つて、その反省の方面と創造の方面との兩方向に進み得るのである。斯く兩方向に進み行くに當つて、具體的意志の内容として現實は一方からは抽象的一般と見られ、他方からは具體的特殊と見られる。具體的意志の無限なる發展の過程として相反する兩方向に無限の行先を見るのである。一方に於ては無限に一般化の方向を見ると共に、一方に於ては無限に特殊化の方向を見るのである。特殊化といふことは全世界の意味を一點に集中することである、全世界の立場に於て働くことである、即ち全世界を一つの意志と化することである。眞の特殊は全體に於て限定せられたものでなければならぬ、否全體を内に含むるものでなければならぬ。此處に内容あるカテゴリーカル・インベラチーフが成立するのである。

五

私は或一つの社會に於て固定せる道德の理想は恰も生物の種屬に比すべきものであると思ふ。生物の生命は一つの大きな流である。現在に於て固定せる種々の種屬と考へられるものも唯一時固定せる一つの生命の型に過ぎない。或一つの生命の型は單に繰返さるべきものとして與へられたのではなく、自己自身を發展し特殊化すべきものとして與へられるのである。言ふまでもなく生命は時間的實在である。過去は生命に於て失はれたものではない、生命は過去を負ひ未來に進んで行くのである。併し一つの生命の型といふのは單に内面的にのみ定まるのではない、外界との關係に於て定まるのである、こゝに適者生存の法則が行はれるのである。或一つの固定せる道德も之と同様の方法に於て定まるのであらう。外界境に適するものが生きるとは外界を自己に同化し得るものが生存すると云ふことでなければならぬ。外界を同化すると云つても、生命が物質を變ずるのではない、唯之を合目的的に統一するに外ならない。單なる機械的因果の實在と異なつた一つの合目的實在が成立するのである、即ち合目的のアブリオリが己自身の獨立の對象界を構

成するのである。此場合に於て合目的的アプリオリが機械的アプリオリを破るのではない、之を超越し、之を要素として、自己自身の世界を構成するのである。若し意識一般が自然界を構成する立場とするならば、自然を同化するといふ時、意識一般の立場を内に含むと云ひ得るであらう。繰返し得る同時存在的自然の立場を超越し、之を内に含む時、それは時間的立場即ち合目的統一の立場となるであらう。自己が自己を反省する時、自己が自己を超越して人格的歴史を構成するのである。此の如き意味に於て自然界を超越して之を内に含むと云ふのは特殊なるものが實在的となることではなければならぬ。「時」の範疇によつて成立する實在は特殊なものではなければならぬ。此處にスピノザの本體からライブニツツのモナッドに移り行く所以がある、右の如く生物的生命といへども、既に單なる自然現象としてではなく、意志の對象界に於てその實在性を有するのである。併し未だ自覺的ならざる生物的生命は、尙それ自身の對象界を有し、己自身の實在性を有することはできぬ。ジイタリスムスが非科學的と考へられるのも之に由るのである。自然科學として合目的因果は regulative Grundsätze の意味しか有することはできぬ。唯意識現象に至つて、始めて我々は眞に自然界を超越して、之を内に含むといふことができる、所謂自然界とは直

接經驗を材料として構成した思惟の産物に過ぎないと考へることが出来る。自然の立法者といふべき純粹統覺を自己の中に見る我々の意識は、完全に自然を超越して自己自身の世界を有すると考へることが出来る。生物的生命は或は之を機械的に説明し盡すことが出来るでもあらう、自然界に還元し盡すことが出来るであらう。自然を構成する自我の意識其者は自然に還元することはできない。是に於て自然の客觀性が消されて、自由我の對象界が成立する、即ち所謂道德的世界が成立するのである。之によつて我々の生命は眞の自立性を得るのである。或一つの社會に於て固定せる道德とは此の如き生命の世界、合目的的世界に於ける生物的種屬でなければならぬ、精神的生命の固定せるタイプでなければならぬ。而して此の如き我々の精神的生命のタイプは、生物の種屬の場合の如く、單なる内面的必然によつてではなく、外界との關係に於て定まらねばならぬ。此意味に於て道德の間にも適者生存の原理が行はれると云ひ得るであらう。併しかゝる場合に於ける道德的外界とは如何なるものであらうか。道德的意志に對してその還境となるものは單なる自然ではない。眞に道德的意志の還境となるものは人格的意志の世界でなければならぬ。人格對自然にては道德的意志は成立しない、唯功利的世界あるのみである。道

德的意志の世界は人格對人格の世界でなければならぬ。無論生物の種屬の自然淘汰に於ての如く、自然的因果律によつて如何なる道德が成立し發展するかが決定せられるとも考へ得るであらう。併し全宇宙を以て我を壓殺するも我は之を知るが故に殺す者より尙いとパスカルの言ふごとく、道德的意志に於ては自然を超越して自己自身の創造に成る對象界を有つと考へることができ、自然其者が中に消されるのである。道德的意志は自己の還境を自己自身の中に包むと考へることができ、自覺に於ての如く作用が作用自身を對象となし、作用が作用を生むのである。自分自身の中に自己の還境を生み、自己自身にて自己を特殊化すると考へることができる。所謂道德法とはかくの如く自分で自分の還境を生み、自分自身を特殊化して行く靈的生命の種屬である。此故に道德法の一面に於ては生物學的法則とその性質を同じくすると考へ得る。機械的法則と同一の意味に於ての一般的法則は成立し得ることはできない。若し機械的法則と同一の一般法に従ふものとするならば、生命はなくなるのである。法を敬し法に従ふと云ふ時、我々は之によつて始めて道德的生命を得るのである。因果律が自然界を與へる如く、道德法は道德界を與へるのである。唯道德的意志の世界は自然界と異なつて個性的實在の世界である。道

徳法の一般性は抽象的一般ではなく具體的一般でなければならぬ。道德法は單に從ふべく與へられるのではなく、之によつて個性的生命を構成すべく與へられるのである。

六

私は嘗て「美と善」とに於て、美の對象界を善の對象界の所與として論じたが、今少しく兩者の關係を嚴密にして置きたいと思ふ。知覺は經驗的知識の資料となるが、その儘の形に於て資料となるではなく、先づ事實と事實との關係をあらはす法則の形に造られねばならぬ。藝術的内容となる純真なる人格的内容が道德的意志の内容となるには、規範の形に造られねばならぬ。事實間の關係を表す法則の形に於て知覺的内容がポアンカレの云ふ如き物理學的原理の材料となる如く、人格的内容は規範の形に於て自覺的意志の内容となる。自覺的意志の内容となるものは、衝動ではなく、規範でなければならぬ。カントの云ふ如く法を理解し法から働くものが意志である。意識一般の立場に於て知覺的内容が概念的となる如く、意志一般の立場に於て衝動的内容が概念的とならねばならぬ。概念的内容といふのは無限なる作

用の作用の立場即ち超越的意志の反省の立場に於て現れ来る内容である。道德法の内容となるものは純眞なる人格的内容でなければならぬ。然らざれば意志は他律的となるを免れない。此意味に於て道德的意志に對して藝術的直觀がその所與となる。併しそれが道德的意志の内容となるには綜合的意志の立場に於て統一せられねばならぬ、全人格の體系に統一せられねばならぬのである。或は與へられたものは求められたものであり、直覺の形式の中にも思惟の形式を含むと考へられねばならぬ如く、藝術的直觀は超越的意志の立場に於て成立し與へられ意志の形式を含むと考へ得るであらう。併し省みられた自己は直に省みる自己ではない。その間には自己自身と自己の影との如き區別を認めねばならぬであらう。

藝術的直觀と道德的意志との間には、右に云つた如く知覺と經驗的知識との如き關係があると考へ得るが、知覺内容が概念的なる經驗的知識に分析し盡すことができないと考へられる如く、藝術的直觀の内容は道德的意志の内容に比して、深く且つ豊富なるものがあるとも考へ得るであらう。道德的意志は何處までも果しなき對立であり、その根抵には不可知的な或物がある。併し此の如き場合に於ては、それは最早や藝術的内容と云ふべきものではなくして、宗教的内容と云ふべきものであらう。